

発行責任者 芳賀義信・武井智己

新しい年を迎えた。しかし、大東一高の新しい一年は去年の11月3日に始まっている。去年のあの日から、全国駅伝に向けての戦いは始まっている。あの日から既に2ヶ月。本番まで10ヶ月を切った。この冬と、夏の鍛練期を如何に鍛え上げられるかが勝負！冬に足踏みして夏で挽回となるとどうしても負担が大きくなる。先々を見据えて、長い目で自身のプランニングをすること。

監督より新年走り始め～山手線一周マラソン～

約20年前にこの企画を始めた切っ掛けは本校でしかできない企画をしたいということだった。当時目標だった保善高校は富士登山や陣馬山の夜間歩行などをしていていたが、あまのじゃくで同じ事をするのは嫌だった。その前の年江戸島の元旦マラソンに参加して、当時2年のエースだった小島（現コーチ）がレース後、膝を故障してシーズンを棒に振った事も一因となった。最初はコースも出来ていなかったの、勝手に地図にコースをなぞり、目標にして走った。自家用車をキンカ堂前に置き、生徒の荷物を車のトランクに入れ、自分も一緒に走った。途中恵比寿以降道がわからなくなり、ショートカットをして、芝増上寺にたどり着いた。その後上野や大塚あたりで、又迷って兎に角池袋までたどり着いた。途中車がレッカー車に持って行かれていないか気が気でなかった。10年以上そんな状況が続き、数年前から保護者のみなさんが車を出してくださり、給水や差し入れまでしていただき、安全で安心な行事になった。心から感謝をしたい。

——山手線一周の経過——

毎年行われる元旦山手線一周マラソンは、大東一高の中でもかれこれ二十年の歴史を持つ伝統の行事である。この伝統というものは、一年という長い月日が積み重なって「一回」が繋がっていく。止めることは簡単だが、長く続けるという事がどれほど大変なのか、また、その伝統を引き継ぐという重みを皆には感じ取ってもらいたい。

1月1日午前7:30に「池袋キンカ堂前」を出発。この日は大阪体育大学の須佐さんと、女子陸上部の和久井先生も参加した。まだ日が出て間もない明治通りを走る。スタート直後に路面電車と併走して新宿へ。初売り前の大都會を通過して明治神宮の見える原宿から渋谷を経て、第一ポイントの恵比寿に到着。恵比寿ガーデンプレイスを背に、第二区間「恵比寿～増上寺」がスタート。この区間が最も長い。第一区間は芳賀監督が先導し、ここからは一年生が先導した。大崎を通過した後は「東京国際マラソン」や「東京箱根間往復大学駅伝」、近年では「東京マラソン」にも使用される第一京浜道路を走行した。次の日にはこの道を各大学のランナーが疾走する。

第二ポイントの「増上寺」は東京タワーの直ぐ近くにあり、大きな本堂のみならず、徳川家の菩提寺でもある。都會と歴史の融合した東京にしかない不思議な空間である。ここで中学生は一旦休憩し、本体は第三区間である「増上寺～不忍池」区間をスタート。ここからは箱根駅伝のスタートである「大手町読売新聞社前」を目指す。皇居を左手に見ながら東京駅と、箱根駅伝の緊張感が伝わるスタート地点を通過。その後は神田から一躍有名になった秋葉原電気街を通過して第三ポイントである「上野恩賜公園・不忍池」に到着。

不忍池は、歴史的には縄文時代、この一帯が東京湾の入り江となっており、大規模な地殻変動によってこの水辺だけが取り残されて池となった。その後、15世紀には「不忍池」という名称で呼ばれていたらしい。そうして現在の形になったのは1884年にこの近辺に出来た競馬場開発の下、各所が埋め立てられて形が整った。この場所から再び中学生と、故障明けの高橋、峯田が合流した。この辺りから足に疲れを感じて前に進まなくなる選手も出てくる。マラソンでもそうだが、疲労感が先行するとラップタイムと一緒に集中力が薄れてくるので注意が必要だ。

第四区間は「不忍池～池袋」である。ここは唯一アップダウンがあり、疲れた足に負担がかかる。日暮里から田端、巢鴨までは細い街道を走り、小石川から池袋までは長い上り坂が待っている。去年ここで離れてしまった選手も何とか粘り、サンシャインシティからスタート地点に帰ってくる事が出来た。

朝早くから半日全部をサポートして下さった父母会の皆様に感謝すること、そして何より、走れることに感謝して2009年をいい形で進めたい。

第85回東京箱根間往復大学駅伝 1月2/3日

大学生アスリートのみならず、高校生アスリートなら誰でも憧れるこの駅伝大会は近年の報道体制も相まって、華々しい反面、非常にプレッシャーも大きい大会である。近年では本校を卒業して、大東文化大学から第82回大会に出場し、7区区間5位で1時間04分58秒で走った村松卓。中央大学から第82回大会9区区間15位で1時間12分20秒・第83回大会10区区間4位で1時間11分55秒で走った宮本竜一。そして今回の第85回大会7区区間22位で1時間08分09秒で走った神奈川大学の川上晃弘。走れることは出来なかったがオーダーまで上った神奈川大学の沼田大樹と、数多くの選手が箱根駅伝で活躍した。

85回大会は多くの波乱を含んだ展開であった。大本命の王者・駒沢大学の思いもよらない一区からの出遅れ、東洋大学の区間新記録での逆転往路優勝など、目まぐるしく状況が変化した。総じて言えることは「駅伝に絶対はない」と言うことだろう。大型新人選手の補強で一年生を数多く起用した早稲田大学も、区間賞を往路では3つとっておきながら優勝を逃した。そして、大東文化大学の6年ぶりとなるシード権の獲得は衝撃的であり、私達に感動と勇気を与えてくれた。出場メンバーの中で一人も1万メートル28分台の持ちタイム走者がいない中での4位は「駅伝は流れ」「チームメイトへの自己犠牲」ということを改めて実感させられた。

3日は7区のスタートである小田原中継所へと向かった。2名の高校生と、4人のOBでのぼりと横断幕を掲げ、卒業生であり箱根ランナーでもある川上を力の限り応援した。都大路の応援もさることながら、箱根駅伝の応援は場所取りから既に戦いでもあった。目の前を一瞬で通りすぎてしまうが、その一区間の為に途方も無い努力を続けてきた彼らには足りないぐらいかもしれない。この大東一高で同じ苦勞と喜びを実感してきた仲間であるからこそ、心からの応援をしてあげたいし、これからの君達にもしてあげたい。この舞台に立てるよう、これからも「限りなき前進」でまずは都大路を目指そう！

監督より「09の箱根駅伝に思うこと」

昨年(2008年)1月3日13時頃私は大手町読売新聞社前の箱根駅伝ゴールテープの後方にいた。30年以上前からこの場所で様子を見てきたが、10年ほど前から、ゴール周辺は身動きが出来ないほどの混雑ぶりだ。以前はゴールテープのすぐ横の空間に場所を確保して、背伸びをしてみたものだ。娘達が幼い頃は肩車をして、見せたのを覚えている。ゴールの奥で、ラジオを聞いていると大東文化9区で棄権というアナウンスが流れた。既に上位候補の東海、順天と途中棄権になっていた。シード権を逃したチームに所属する選手達の悲壮な表情が見える。1年たって又この日がやってきた。12月の初めに一人の学生の不幸事で出場も危ぶまれた東洋が勝ち負けの欲も消え、出場できる喜び一杯に伸び伸びとした走り、先頭をひた走っていた。7区で本校の卒業生川上晃弘(神奈川大3年)が走ったが、緊張のためか、実力の半分も力を発揮できずに終わってしまった。そんな状況の中で4月からコーチ、8月から監督に就任した奈良修氏率いる大東文化大が丁寧に粘る走り、シード権内の位置で頑張っていた。今年はゴール近くに用意してある特設スクリーンの前でテレビを見つめながら、ゴールを待っていると、国士館大学の岡田先生と常磐高校の伊藤先生と出会い、一緒に観戦した。2人とも奈良監督と同じ保善高校の卒業生で、30年以上の親交がある。お二人の母校の国士館大は惜しくも11位だったが、大東大はゴール前の激しい争いで、4位に入賞した。6年ぶりのシード権である。周囲にいる大東大の関係者が大喜びしている。第一高校のPTAでお世話になった多くの皆さんにお目に掛かった。大学の父兄会でも活躍していただいているようだ。その後サンケイプラザで行われた大東大関係者の選手慰労会に高校の監督としてお招きいただいていたので、挨拶に伺った。この数年残念な結果になっていたのも、予め掲げていた名目を急遽祝勝会に変えて、奈良監督を初めとした選手を迎え、選手紹介と挨拶を受けた後、表彰式に移動する選手達を見送った。

奈良監督自身「この結果に驚いていると同時にこの後が大変だと思います。」という挨拶が印象的だった。私自身奈良監督とは大変深い縁を感じている。20年以上前のことになるが、当時本校が目標にしていた同じ支部で一緒に合宿をしていた保善高校に彼が入学してきた。有望な新人が入ってきて、また保善との差が開くなあと感じていたが、1年の後半から2年の夏の合宿までは全く走れない時期があった。車山の合宿では朝昼晩3回の練習だったが、ほとんど私と一緒に散歩をしていた。このままずっと走れなくなるのではないかと不安と戦いながら歩いていた。似たような苦しみを乗り越えて活躍した米重選手の例などを挙げて励ました。その後、徐々に走り始め、11月には保善の

1区を走るまでに調子が戻り、3年の春からは全国大会レベルに記録を伸ばし、秋に大東文化大の進学が決まった後から、さらに急成長をし始めて、世界ジュニアの代表にもなり、大学1年次の箱根駅伝5区山登りでは区間新記録の鮮烈なデビューを果たした。今年で言えば東洋大に柏原選手とそっくりな状況だ。その後大学から実業団へと進み、オリンピックには後一步及ばなかったものの、日本長距離界の第一線で長く活躍したのである。一昨年の12月に奥さんが亡くなり、小学生のお子さんをかかえて、今年度から大東大の指導者に就任したということで再会したのが、4月初めの日体大競技会だった。コーチとしての身分もはっきりしない不安なスタートで、その後8月に監督になったが、10月の箱根の予選会ではぎりぎりの通過だった。その後11月22日の関東高校駅伝で高校時代のライバルでもあった本校の小島コーチと共に再会し互いに励まし合った。そして今回の奇跡のような結果を見ることができた。一万メートルの持ちタイムで言えば、出場23チーム中20番目位ではないだろうか？それが4位というのは人間の可能性の不可思議を考えざるを得ない。監督の損得のない駅伝への情熱が禰と選手に伝わり、突き動かしたとしか思えないのである。

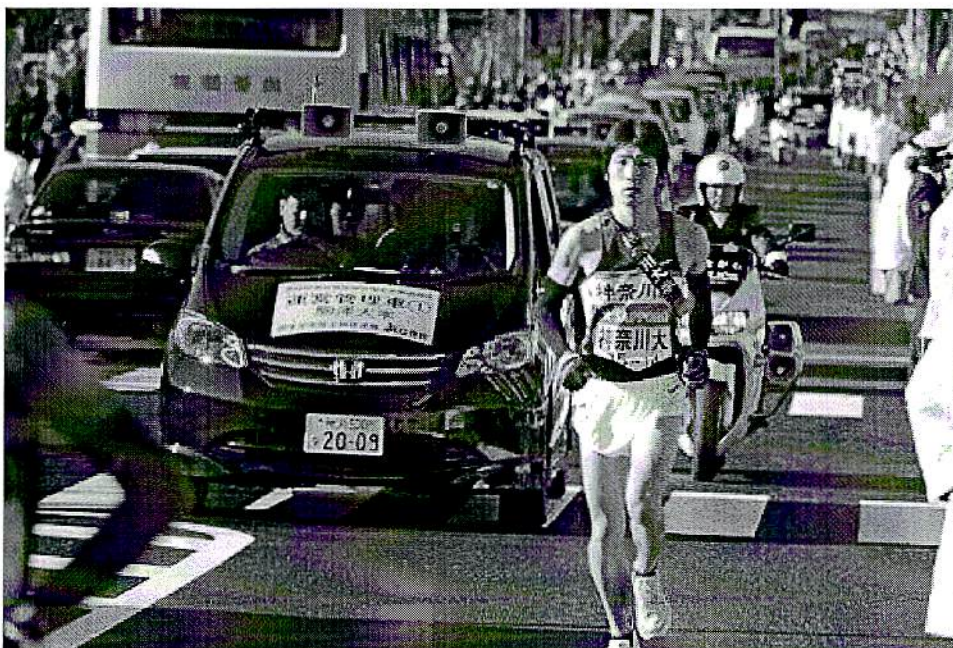
春までの目標	インターハイシーズンの目標	トラックでの目標	チーム内での目標
* 筋力トレーニングや新入生への接し方等	* 東京都大会や、その上での大会で出場種目やタイム、順位など。	* 800m・1500m・5000m 3000SCでの目標タイム。	* どのような役割でチームに貢献するのか。(練習中に掛け声を積極的に出して練習を盛り上げる等)
○	○	○	○



第一区間の走り
高田馬場付近



第二ポイント
芝増上寺にて



箱根駅伝7区
神奈川大学川上選手